特集

留学生に対する学習面での日本語サポート

私立大学では、留学生の増加や国際化推進を背景として、10年ほど前から、大学組織として論文作成講座やチューター制度などの対応が始まり、現在はアカデミックライティングをはじめ授業外で多様な日本語学習サポートを行っている。

その取り組みの一つが、日本語支援の拠点となるセンターなどの設置である。留学生の多様なニーズに応えたり、留学生と日本人学生が学び合えるプログラムが提供されたりしている。

二つ目として、留学生の自主的な日本語学習を支援する取り組みが挙げられる。学術論文の執筆に目的を絞った取り組みもある。外国人留学生が日本語で論文を作成するとき、専門用語や独特な形式に戸惑い、非常に苦労することが多い。そのため、日常会話や簡単なレポート作成はできても、卒業論文などに代表される専門的な論文を作成するには、改めて日本語を学習をする必要がある。

本特集は、各大学のさまざまな取り組みの紹介を通して、留学生への学習面の支援体制について情報共有の機会としたい。

留学生に寄り添う日本語自律学習支援

寅丸 真澄
●早稲田大学日本語教育研究センター准教授

兵庫国際交流会館でのライティング支援
――神戸大学の取り組み――

森田 耕平
●大阪府立大学客員研究員

大学院における留学生支援
――明治大学の日本語論文作成支援を中心に――

外池 力
●明治大学政治経済学部教授、大学院教務主任

学内リソースを生かした日本語サポートの設計
――「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ――

丸山 千歌
●立教大学日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授

特集

留学生に対する学習面での日本語サポート

留学生に寄り添う日本語自律学習支援

寅丸 真澄●早稲田大学日本語教育研究センター准教授

1 留学生の増加・多様化と日本語学習支援

早稲田大学の国際化は着実に進み、2018年度には、世界125の国・地域から訪れた7942名の外国人留学生（以下、留学生）が学んだ。多様な背景や言語をもつ留学生の増加によって、キャンパスは刺激的な知的交流と異文化体験の場となっている。

一方、留学生の増加と多様化に伴い、受け入れ体制の整備も喫緊の課題となっている。留学生は生活、学習、進路の三つの面で問題を抱えることが多いため、生活面では留学センターや異文化交流センター、学習面ではライティングセンター、進路面ではキャリアセンターというように、学内の関連機関が連携して行っている。

しかし、最も根深いのは日本語能力の問題である。たとえば、前述の支援機関では英語対応が可能だが、事前予約が必要な場合もあり、いつでも自由に利用できるとはいえない。また、英語学位プログラムの留学生でさえ、日常生活ではある程度の日本語能力が必要となる。

このような留学生に対する日本語教育の中枢が、国内最大規模の日本語教育研究センター（CJL：Center for Japanese Language）である。CJLでは、2018年度に4772名（年度延人数）の留学生に毎週650コマの多様な日本語科目を提供している。

2 わせだ日本語サポート

CJLは、本学の日本語教育の中枢として、多様な日本語科目を軸に、ティーチングアシスタントや日本語授業ボランティアなどの直接学習支援システムを完備する

一方、間接学習支援システムの一つとして、「わせだ日本語サポート」による日本語自律学習支援を行っている。

「わせだ日本語サポート」の開設は、２０１１年に遡る。この年、東日本大震災が起き、来日する留学生が激減した。帰国する留学生も増え、新学期の授業開始が延期されるなか、「わせだ日本語サポート」は、日本にとどまっている留学生のための支援機関として開設された。高等教育機関における日本語自律学習支援機関は稀有であり、現在も時折見学者が訪れる。

開設の目的は、留学生の日本語学習に関わる問題の解決と、日本語の自律学習の促進である。ＣＪＬが他大学に先駆けて、このような機関を設置した理由は二点ある。一点は、留学生の増加と多様化が進み、留学生個々の日本語学習ニーズを満たすためには、留学生自身による学習内容や学習方法の選択、管理が必要になってきたからである。二点目は、留学生を含む全学生の自律性の育成は、学校教育の最終段階である高等教育機関の最重要課題だからである。

３　支援体制とスタッフ

現在、ＣＪＬの留学生ラウンジ内にある「わせだ日本語サポート」では、毎週３日、１日６時間、３名（全９名）の学習アドバイザー兼スタッフ（以下、スタッフ）によるピア・サポートが行われている。

本学の留学生は誰でも利用できる一方、スタッフは日本語教育研究科を中心とする大学院生である。また、留学生のスタッフも在籍しており、複数言語による対応が可能である。留学生と同じ視点から、時には同じ母語で留学生の日本語学習に寄り添うという支援のあり方が、教員による授業とは大きく異なっている。このようなピア・サポートは留学生の心理的障壁を下げ、スタッフに対する信頼感を抱かせる。支援を信頼し、頻繁に通ってくる留学生や、相談事項がないのに顔を見せる留学生もいる。

一方、スタッフも、担当教員が参加する定期ミーティングによる情報交換や研修に加え、自主的に勉強会を開くなど、日本語教育や自律学習についての知識やアドバイジング・スキルの向上に努めている。「わせだ日本語サポート」は、留学生とスタッ

フ双方の学びの場であるといえる。

4　多様な活動内容

「わせだ日本語サポート」の活動は、アドバイジング・セッション、セミナーの運営業務、広報物の作成である。

アドバイジング・セッションは、学習計画や学習方法を留学生とともに検討する「学習アドバイジング」、日本語の文法や語彙、会話や作文などの質問や相談に応じる「日本語相談」、教科書や教材、アプリなどを説明、紹介する「学習リソースの紹介」、相談内容に応じて学内機関や施設を紹介する「関連機関・施設の紹介」の四つに区分できる。

また、セミナーの運営業務としては、ＪＬＰＴ（Japanese-Language Proficiency Test）対策セミナーや、留学生向けキャリア・セミナー、キャリア個別相談会、修了生から就職や進学の経験談を聞くセミナーなど、関係各所と連携しつつ、留学生に寄り添ったイベントを企画・運営している。これらは留学生の日本語学習を動機付け、日本語によるキャリア・パスを示す役割を果たしている。アドバイジング・セッション同様、イベントにおいても、留学生個人のキャリアという視点から、日本語学習の動機付けを行い、自律的で持続可能な学習を促している。

さらに、自律的で持続可能な日本語学習を計画・促進するための「わせだ日本語ポートフォリオ」、学内外に活動内容を広報する「わせだ日本語サポートＮＥＷＳ」を毎年発刊している。

5　利用実態と新たな役割

イベントの開催や広報活動が実り、「わせだ日本語サポート」の利用者は増加している。２０１８年度はセンター所属学生のほか、７学部14研究科２９５名の留学生が利用したが、本年度は半期でそれを上回っており、昨

年度の2倍以上になると予想される。

2018年度の所属別利用者割合は、CJL所属の留学生（日本語科目のみ履修している留学生）が52％と最も多く、次いで大学院生27％、学部生21％の順になっている。利用者の相談内容としては、通年では「書く」（17・4％）、「学習方法」（12・6％）、「文法」（11・4％）、「学習計画」「話す」（各9・3％）など、4技能や学習管理に関する相談件数が多い。ただし、履修科目の学習内容や課題、テストの有無などによって、相談内容は変化する。また、授業に関わる相談のほか、携帯電話の契約書から研究計画書やエントリー・シートの日本語相談に至るまで、多岐にわたっている。

さらに、近年は、留学生支援のフロントラインに位置する機関として、留学生支援の「ハブ」的な役割が求められるようになっている。留学生支援は学内の複数機関で行われているが、その実態を知らない留学生の多くが「わせだ日本語サポート」に駆け込んでくるため、相談内容を聞いて適切な機関を紹介するという業務が増えている。留学生活全体にわたる、留学生と留学生支援機関をつなぐ役割が期待されているといえる。

6　豊かな留学生活を目指して

留学生支援は、生活や学習、進路といった多様な観点から多元的に行われなければならない。また、それぞれ独自の役割を担う学内支援機関が、留学生の学生生活を豊かにするという目的を軸に「留学生支援システム」としてシステム化され、大学組織の中で有機的に機能していくことが期待される。

学習支援の一つである日本語学習支援においても、多元性は避けられない。多様な学習者の日本語能力を向上させるには、教師による授業とピア・サポート、教室内と教室外、集団と個人、直接支援と間接支援というように、多元的な支援が必要になる。

大学の急速な国際化に伴い、「わせだ日本語サポート」の「日本語自律学習支援」の重要性も日々増している。大学組織における多元的な留学生支援システムの中で、他機関と有効に連携しつつ、留学生の日本語能力の向上と自律性の育成という役割を十全に果たし、留学生の豊かな留学生活に貢献することが今後の大きな課題であるといえる。

特集

留学生に対する学習面での日本語サポート

兵庫国際交流会館でのライティング支援

――神戸大学の取り組み――

森田 耕平●大阪府立大学客員研究員

はじめに

本稿では、兵庫国際交流会館（以下、会館）において2017および2018年度に行われた「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ（以下、ラボ）」と称する留学生対象の学習支援※について紹介する。この取り組みは日本学生支援機構委託事業の一環であり、委託を受けた神戸大学が企画・運営を担ったが、私立を含む兵庫・神戸地域の大学などの留学生を広く対象としている。本稿では、留学生一般に対するライティング支援の一事例として、実施の概要と結果、および課題を述べることとしたい。

図表1　兵庫国際交流会館の外観

※詳しくは森田耕平（2019）「兵庫国際交流会館における留学生に対する日本語アカデミックライティング支援」（『神戸大学留学生教育研究』3号）を参照。また、同種のプログラムは2019年度以降も継続中である（https://g-navi.jp）。

1　実施の背景

日本学生支援機構が所有する会館は、留学生が居住する寮であるとともに、居住者以外も利用可能な多目的ホール、研修室などの交流・学習スペースを備えた施設であ

る（図表1）。2016～2018年度に、会館を国際交流拠点として活性化するための委託事業「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」を、兵庫県内の大学などの連携組織である一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸（以下、コンソーシアム）と神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター（以下、センター）が実施した。本事業は多文化共生推進、グローバル人材育成を趣旨とし、多文化理解、日本語教育、防災教育、キャリア支援といったテーマのプログラムが実施された。センターは、学外での日本語学習を促進するプログラムの一つとして、ライティング支援を実施することとした。

2　取り組みの概要

(1)　目的と理念

プログラム実施の目的は、第一に、日本語による学術的文章作成に関するアドバイスを通じた留学生への学習支援、第二に、支援者となる日本人学生（チューター）の養成である。留学生が、レポートや論文などの個々の課題について、指導教員による内容面の指導に加え、文章作成や日本語の表現面の助言が得られる機会が設けられることは、留学生はもちろん、指導教員にとっても有益であろう。また、チューターが文章作成とその指導の一般的なスキルを高めることは、専門を超えて、キャリアのさまざまな局面で役立つと考えられる。そうした意識に基づき、企画に際しては、所属や課程、専門を異にする留学生が自由に利用でき、チューターが一貫した指導方法を身に付けながら支援を行える仕組み作りを目指した。

指導の理念と方法については、各地の大学のライティングセンター、特に早稲田大学の実践※を参考にした。その取り組みでは、「書き手が、自ら書いた文章について責任を持つことを支援する」ことを基本理念とし、個別指導（チュータリング）方式が採られている。それは一方的な「添削」指導ではなく、「書き手の意図を尊重し、対話を重視する」「文章を直すのではなく、書き手を育てる」といった理念に基づくアドバイスを主眼としている。

具体的な指導方法に関しては、早稲田大学ライティング・センターの見学や、スタッフを招いてのセミナーによって多くの知見を得た。

※詳細については佐渡島紗織・太田裕子編（2013）『文章チュータリングの理念と実践――早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』（ひつじ書房）を参照されたい。

(2) 実施の体制

① 期間・日時・場所・対象　委託事業の性質を反映し、放課後に学外で実施したことが特徴である。

【期間】12週～13週×2期

【日時】平日3日間、18～21時、各日45分×3コマ

【場所】兵庫国際交流会館1階の学習スペース

【対象】兵庫県内の大学などの留学生

② 利用の原則　「領域を横断し、ライティングを過程において指導する」という理念に即して、文章の種類や専門、段階を問わず、支援の対象とする。

【文章の種類】日本語で書かれた学術的文章（レポート、発表資料、論文、研究計画書など）。

【文章の準備】構成、下書き、仕上げなど、いずれの段階でもよい。書き手は印字した文書を持参。

【予約制】ウェブから利用希望日時を予約。

【利用回数】繰り返し利用可。原則として1日1コマまで（ただし空きがあれば2コマ連続も可）。

なお、担当チューターの固定や指名は行わなかった。同じ書き手を同じチューターが担当するとは限らず、1回45分完結で指導するということである。

③ 規模　2017年度は運営方法を模索しつつ各日チューター1名で開始した。2018年度から1日に複数のチューターが勤務し、支援の機会をより多く設けることとした。

【2017前後期】チューター3名、週9コマ

【2018前期】チューター8名、週16コマ

【2018後期】チューター9名、週27コマ

④ チューターの組織　チューターは、原則として、学術的文章の作成と指導に関する次のプログラムを受講した大学院生から募集し、神戸大学の非常勤職員として雇用した。

【セミナー】一日完結型、委託事業により実施。他大学の学生、教職員、ボランティアなども参加。

【講義】神戸大学人文学研究科（大学院生対象）の授業として実施。

2018年度のチューターは全て神戸大学所属、研究科は人文学、国際文化学、経済学、経営学、国際協力、課程は博士課程3名、修士課程9名であった。

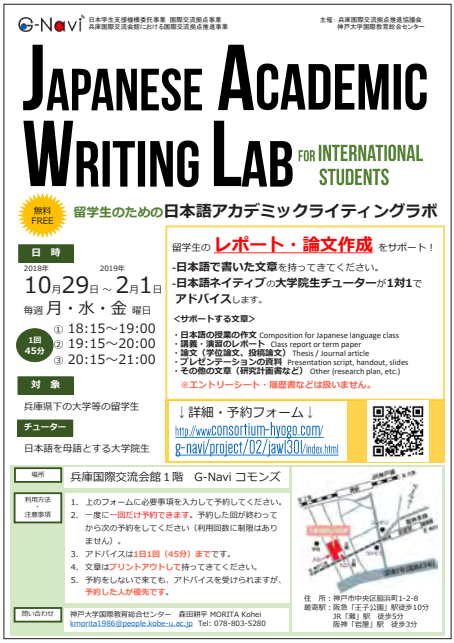
⑤ 広報　利用者（留学生）への周知は、ポスター（図表2）と予約用ウェブページを作成した上で、次の経路で行った。

【神戸大学】各部局の留学生担当者に連絡・説明。

関係部局で掲示、センター開講の日本語授業などで告知。

【他大学】コンソーシアムを通して各大学担当教職員に連絡、関連プログラムで告知、会館居住者にポスティング。

⑥　教員の役割　担当教員（筆者）は、前記業務（期間・方法・規模などの策定、チューターの募集、広報）全般を担当。また、実施期間中は予約管理と連絡、現地の運営業務、チューターと留学生の指導。



図表２　ライティングラボのポスター

(3)　指導（セッション）の流れ

45分間のセッションの流れは、次の通りである。

【開始前】チューターは書き手の情報を「個人ファイル」で確認する。

【開始後】書き手とチューターの双方が、書き手が記入した「ウェルカムシート」によって課題の種類、段階および書き手が検討したい点を確認する（導入）。次に、文章を一読して問題点をチェックし（文章診断）、セッションの目標や問題の優先順位を決める（目標設定）。次いで、書き手の意図や改善策を引き出す対話を行いながら、ライティングの各要素を意識しつつ文章の検討をすすめる（文章検討）※。

【終了後】チューターは「まとめシート」（図表６）で指導を記録する。書き手はアンケートを記入する。

以上の手順は、早稲田大学の方式に沿ったものである。特に強調しておきたいのは「目標設定」の重要性である。後で示すように、ラボを利用した留学生は、日本語の表現や文法のチェックを希望することが多かった。しかし、文章には論理展開や章節・段落の構成といった、ライティング一般に関わる、より大きな問題が見られる場合もあ

る。また、短時間で全ての表現の問題を扱うのは難しい場合も多い。そこで、ただちに表現の修正に取りかかるのではなく、ほかの問題を検討する必要はないか、どこまでの範囲を扱うかといった点をチューターと書き手が交渉し、目標を共有することが必要となった。

※文章検討のポイント、対話重視の指導については、前掲佐渡島・太田編（2013）、森田（2019）を参照されたい。

図表3　指導の様子

3　実施の状況

(1)　利用のデータ

ラボの各期間の利用件数と稼働率は、次の通りである（カッコ内は%）。規模と周知の拡大を反映して、2018年度は大幅に利用が増加した。また、扱う文章の種類（学位論文）に応じて、各年度後期の利用が多かった。

【2017前期】48件（42・1）
【2017後期】133件（116・7）
【2018前期】102件（50・0）
【2018後期】235件（76・8）

利用回数別の人数と割合は、「1回」が63人（36・2）、「2～4回」が84人（48・3）、「5～9回」が21人（12・1）、「10回以上」が6人（3・4）であり、複数回利用した書き手が6割以上を占めている。

以下は、この計518件について、セッション前に記入する「ウェルカムシート」の情報から、書き手の属性と課題の性質を中心に実施の状況を示す。

①　**書き手の属性**　所属大学・課程・出身・住居を示す。

神戸大学以外の大学では、関西学院大学、甲南大学、関西国際大学、兵庫県立大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学といった国公私立大学に所属する留学生の利用があった。課程・専門

所属大学	神戸大学（90.3）、その他大学など（9.7）
課　程	学部・交換（12.2）、研究生（21.2）、修士課程（41.7）、博士課程（21.4）、その他（3.5）
出　身	中国（73.4）、台湾（10.4）、韓国（4.2）、ベトナム（2.9）、その他（9.1）
住　居	会館外居住（81.7）、会館内居住（18.3）

図表4　書き手の属性

では文系の大学院生（研究生含む）が中心ではあるが、理系の院生や学部生の利用も見られた。

② **課題の性質**　文章の種類と段階、書き手が検討を希望した点（複数回答あり）を示す。

「検討したい点」は、セッションで実際に検討された点と同じとは限らない。チューターとの交渉や指導の展開によって、他の問題が扱われる場合もあるためである。

以上から、最も多かったセッションの内容は「大学院生に対する、途中または完成段階にある学位論文の、日本語の文法・表現の検討」ということが分かる。

文章の種類	修士論文（26.4）、レポート（21.6）、発表資料（11.2）、投稿論文（6.8）、博士論文（6.2）、作文（2.5）、卒業論文（1.2）、その他（24.1）
文章の段階	ブレインストーミング（2.9）、アウトライン（2.9）、途中（26.0）、ほぼ完成（59.3）、不明（8.9）
検討したい点	構成（13.0）、内容（11.5）、表現（32.5）、文法（34.6）、引用・参考文献（4.3）、その他（4.3）

図表５　課題の性質

(2) 課程ごとの利用傾向と指導上の留意点

指導においては、所属大学や出身（母語）よりも、課程にある程度対応して、学術的文章作成の基礎や、日本語表現に関する理解・習熟の度合いが指導の方法・内容に大きく影響したと考えられる。そこで、次に、課程ごとの利用傾向と指導上の留意点を述べる。

① **修士課程**　修士1年ではレポート・発表資料が中心であり、短めの文章において学術的文章作成の基礎に関する指導が求められた。修士2年は修士論文の検討が大半であり、分量が多く構成も複雑になるため、文章の全体像の把握と目標設定、複数のチューターの連携による指導が重要になった。

② **博士課程**　博士論文と個別テーマの資料・論文が大半を占めた。日本語チェックのみを明確に希望した書き手がいた一方、テーマや構成を検討したケースもある。一方的に修正を指示するのではなく、チューターが検討の必要性を伝え、書き手に判断を委ねるプロセスが重要になった。

③ **研究生**　研究計画書などの文章の検討が中心であり、修士1年と同様、基礎事項の指導が必要になったケースが多かった。日本語のコミュニケーションに慣れていない書き手に対しては、分かりやすい言い方をすることや、図などの視覚情報の活用が重要になった。

4　成果と今後の課題

(1)　書き手の反応

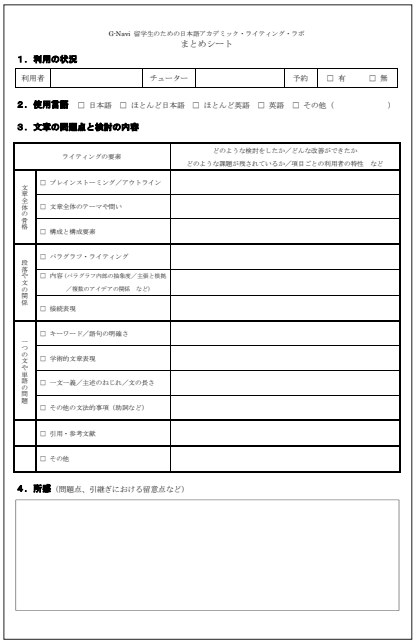
セッション後のアンケートでは、書き手の満足度は総じて高かった。ラボを利用してよかった（役立った）点（自由記述）では、まず、「文法を直してもらい、自分の言いたいことを正しく表すことができた」「日本語の微妙なニュアンスを指摘してくれた」といった、文法や学術的表現に関するアドバイスへの評価が最も多かった。「論文の全体的な流れを整理してくれた」「序論の書き方が分かった」など、内容や構成の指導についても肯定的な回答が見られた。

チューターの指導に関しては、説明や問題点の修正に対する評価と、「いつも互いの考えていることが一致しているかどうかを確認してくれた」「論文の構成と内容を一緒にディスカッションするように考えてくれた」といった、書き手との対話の姿勢に関する評価の双方があった。

ラボの仕組みについては「セッションの時間が短い」という声が多かった。これについては、期間中の改善策として、検討する点を事前に考えるよう促す、目標設定を素早く行い検討の時間を多くとる、空きがあれば2コマ連続の利用も可とするといったことを試みた。

(2)　チューターの学びと課題

各期末の振り返りによれば、チューターは「書き手の理解度を考慮し、問題意識を尊重した指導を行う」といった基本的な姿勢、導入段階の雰囲気づくりや背景情報の把握、セッション全体の構想・時間配分への意識が身に付いたと答えている。一方、短時間で文章の全体像や問題点を適切に把握すること、一方的な指示にならない対話の方法、日本語の表現に関する知識とその指導といった技法面の課題を挙げるチューターが多かった。



G-Navi 留学生のための日本語アカデミック・ライティング・ラボ
まとめシート

1．利用の状況

利用者		チューター		予約	□ 有　□ 無

2．使用言語　□ 日本語　□ ほとんど日本語　□ ほとんど英語　□ 英語　□ その他（　　）

3．文章の問題点と検討の内容

	ライティングの要素	どのような検討をしたか／どんな改善ができたか どのような課題が残されているか／彼自ごとの利用者の特性　など
文章全体の骨格	□ ブレインストーミング／アウトライン	
	□ 文章全体のテーマや問い	
	□ 構成と構成要素	
段落と文の関係	□ パラグラフ・ライティング	
	□ 内容（パラグラフ内部の独自性／主張と根拠／複数のアイデアの関係　など）	
	□ 接続表現	
一つの文や単語の問題	□ キーワード／語句の明確さ	
	□ 学術的文章表現	
	□ 一文一義／主述のねじれ／文の長さ	
	□ その他の文法的事項（助詞など）	
	□ 引用・参考文献	
	□ その他	

4．所感（問題点、引継ぎにおける留意点など）

図表6　まとめシート

また、ラボを複数回利用する書き手が中心で、同一の文章を扱うケースも多かったことから、異なるチューター間での指導状況の引継ぎを、組織としての課題とするチューターも多かった。そこで、セッション後に記入する「まとめシート」（図表6）について、スタッフで協議し、項目や書き方を改善することで、継続的な指導が可能になるようにした。

(3) 運営上の成果と課題

2年4期間を通じて、会館で実施されている他の学習支援と重ならず、会館外から来る留学生にも有益な取り組みとして、ライティング支援を実施することができた。「学内における日本人学生も対象とした支援」と、「学外の留学生支援」を趣旨とする本事業では異なる部分もあるが、指導の理念と方法は、場所や書き手の母語に関わらず有効であったように思われる。また、兵庫国際交流会館を拠点に学習支援が行えたことは、大学の授業や指導とは別に、学外に自主的な学びの場を設けるという意味で意義があったように思われる。

ただし、ラボでは、大学の授業との連携や事前の継続的な研修など全面的には実施ができず、学外の活動であるためスタッフの情報共有や引継ぎも難しかったことから、チューターの養成が課題となった。そこで、期間中のミーティングやトレーニング（他のチューターのセッションの観察、文章検討など）を導入し、指導方法の検討や書き手に関する共有を行うことによってこれを補った。

また、稼働率の向上という点では、論文提出時期以外の利用や、神戸大学以外の学生の利用を促進する余地もある。教職員、留学生への周知をすすめるとともに、ライティングの基礎に関する講義形式の支援や、神戸大学以外の大学に所属するチューターの参加、他大学のスタッフとの交流など、委託事業の柔軟な枠組みを生かしたアプローチも可能であろう。

特集

留学生に対する学習面での日本語サポート

大学院における留学生支援

――明治大学の日本語論文作成支援を中心に――

外池 力●明治大学政治経済学部教授、大学院教務主任

明治大学は、現在、国際化を進めており、２０１８年度は１８１６名の正規留学生が学んでいる。そのうち大学院の留学生は５７２名、大学院在籍者の約23％である。留学生は、文系の社会科学系で特に多く、入学試験も高い倍率となっていて、しっかりとした動機や鋭い問題意識のある留学生が多い。しかし、学部の留学生と異なり、わずか1年で学位論文の執筆に取り掛からなければならず、本人の苦労はもちろん、指導教員の負担も大きい。もちろん研究室での先輩や同期の院生たちの指導や支援も重要であるが、研究科共通の取り組みとして日本語論文作成の支援体制は欠かせないものとなっている。

本学大学院では、論文を書くのに必要な日本語能力の向上を目指す留学生のための取り組みとして、「日本語論文指導講座」と「日本語論文添削指導」を実施している。

「日本語論文指導講座」は、正規科目ではないが、2名の外部講師により、春学期2コマ、秋学期2コマを駿河台・和泉・中野のキャンパスで開講している。全11回の講座は、日本語論文作成のためのアカデミックライティングの初級講座として、論文の構想や構成、先行研究の扱い方、図表の提示や引用の方法を学び、論文に適した文体・表現の修得を目的とし、十数名程度の少人数クラスで行われ、２０１８年度の受講者は42名である。

「日本語論文添削指導」は、駿河台・和泉・中野の3キャンパスで開講され、留学生が実際に執筆した論文の日本語表現を個別対応によって添削している。本学で博士の学位を取得した者の中から採用された教育補助講師が通年4名、さらに修士論文執筆のピークである11～12月（繁忙期）には2名を加えて、日本語論文の添削指導

にあたっている。論文内容の指導ではなく、日本語の添削に限定して行うようにしている。専用の教室を確保し、一人につき1回90分の範囲で指導しており、２０１８年度の受講者は延べ６４２人である。

このほか、大学院の留学生限定ではないが、明治大学国際連携機構が行っている「留学生共通日本語」（初級～上級）、日本語学習支援としてのＴＡ制度やオフィスアワーなどもある。駿河台キャンパスのグローバルフロントには、大学院事務室と国際連携部があり、院生の共同研究室、メディアラウンジ、グローバルラウンジ、カフェなどもあって、大学院の留学生にはとても研究しやすい環境となっている。さらに、大学院の留学生を対象とするキャリア支援のプログラムが展開され、留学生向けの奨学金も充実している。

もちろん、このような支援制度があっても、留学生が多くなった現状に鑑みると、普段の研究はもとより、学位論文の指導のために、支援制度のさらなる充実が求められるが、予算の制約もありなかなか実現できない。今後は、日本語指導などの支援体制における課題について、毎年行っている「大学における学びに関するアンケート」を活用して留学生と教員それぞれの意見を反映させるなど、効果的な改善方策を検討する必要がある。

このようななかで、留学生の博士学位取得者や研究職への就職者が増えてきたことは、努力を重ねている院生や教員にとってとても励みになる。また、研究指導や教育現場における地道な努力や支援体制が評価され、本学大学院は、日本語教育振興協会による「日本留学ＡＷＡＲＤＳ」の「大学院部門」に２０１６年から3年連続で入賞している。その推薦理由には、「日本企業への就職率」や「学生の満足度」が高いことに加え、特筆すべきは、「修士論文が書けず苦労している留学生に対する事務局スタッフのサポート」が挙げられている。

最後に、やはり一番気になることは、本学に限ったことではないが、日本人学生の大学院離れである。大学において図書館をはじめ研究面が活性化されるには大学院生のプレゼンスと積極性が重要なことはいうまでもないが、留学生も、さまざまな価値観を持つ多くの日本人学生と共に学び、研究することを望んでいる。大学院の学びが重視されるには、まさに大学院における教育研究のように、手塩にかけて人を育てるプロセスが適切に評価される社会になっていくことが重要である。

特集

留学生に対する学習面での日本語サポート

学内リソースを生かした日本語サポートの設計

――「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ――

丸山 千歌●立教大学日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授

はじめに

日本留学を経験した留学生には、日本で職を得て生きる、日本で数年間の就業経験を積んだ後に自国または第三国で生きる、自国または第三国で何らかの形で日本とつながって生きるなど、さまざまな人生の経路の可能性がある。

現在、立教大学には、学位取得を目指す正規課程の外国人留学生（以下、正規留学生）、半年から1年間、本学に在籍する特別外国人学生（以下、特外生）など、2019年5月現在で留学生が約1000人在籍している。留学生の受け入れは、スーパーグローバル大学創成事業の取り組みの一つとして位置付けられており、今後も拡大する方向にある。この中で、日本語教育担当者の視点で留学生の学びに接していると、彼女彼らが、日々の講義・研究の活動の中で起きる日本人の教員・学生とのやりとりの中で、日本人の考え方や態度、日本社会の姿を観察し、自分自身のキャリアを模索している様子が見受けられ、日本留学中の学習経験が、まさに彼女彼らのキャリア選択の重要な要素となっていることが分かる。

そこで、本学留学生の学習に対する日本語サポートは、留学生が、自身を取り巻くさまざま

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304
その他	0	0	0	1	8	0	2	0
合計	144	153	181	237	424	428	407	438
増減	100.0	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2

2011－2018年度　日本語相談室の利用件数の推移

な人の存在を、経験をもって認識すると同時に、目的を持った活動を通して多様な意見に触れる機会になるよう、学内リソースの力を得ながら、意図をもって設計・実践されている。現在も改善と開発のまっただ中ではあるが、本稿では、今後の課題を含めて中間報告的にありのままの姿を報告する。

1　自律的な学びを支える

日本語教育センター設置（２０１１年度）以前または設置当初から実施されている学習に関する日本語サポートは、自律学習に関するものとして、チューター制度と「日本語相談室」がある。

チューター制度は、国際センターが実施しており、日本語教育センター設置の約30年前からあるサポート体制で、特外生向けのもの（一般指導）と正規留学生向けのもの（外国語論文文章指導）がある。どちらも活動の中心は学習面のサポートにある。特外生向けのものは、指導教員が特外生のニーズを聞いてチューターを手配する。特外生とチューターとの顔合わせの際には、日本語クラスの予習、復習や会話練習、研究資料の読解補助といったサポート内容を確認し、いつ、どこでサポート活動を行うかといった大まかな計画を立ててから実際の活動に入る。サポート活動がうまく機能するケースは、定期的に活動を行えており、友人関係も構築できていく。サポートする側の学生からは、「留学生から質問を受ける中で、普段何気なく使っていた日本語を分析する視点が得られた」、「日本の社会、文化、歴史について、知っているようで知らなかった自分に気付き、学びの動機が高まった」といった声を聞くことがあり、サポートする側とされる側の双方に有意義な活動になっていることが分かる。

また、「日本語相談室」は、日本語教育センター設置当初に設計された学習面の日本語サポート事業である。１週間に12コマ（２０１９年度から１コマ１００分）開室しており、予約制で１回50分、日本語教育センターの日本語教員による日本語学習相談を受けられる。相談内容は、日本人と一緒に授業を受けている正課科目のレポート・論文の日本語文章指導、日本語の学習方法に関するアドバイス、各種日本語検定試験の情報、受験に役立つテキストや問題集の紹介、就職活動のエントリーシートや奨学金申請書などの日本語文章指導である。

この日本語相談室事業は留学生のニーズをくみ取って計画されたが、運用を軌道に乗せるには課題があった。

相談場所が教員の研究室の並ぶフロアにあり、予約は事務局での対面による事前受け付けに限定されていたため、決して学生が利用しやすい条件ではなかった。そこで、来室する学生に対するていねいな指導はもちろん、学生への直接の呼びかけに加えて、日本語相談室についての教員向けチラシを作成するとともに、学内の関係委員会で各部局の教員に日本語相談室の広報を行って、徐々に数字を伸ばしたものの、適正な稼働率とはいえなかった。運用が軌道に乗ったのは、2015年にウェブ予約システムを導入してからである。これによって学生の利便性が格段に上がったようであり、導入初年度の利用件数は前年度の1・84倍に増えた。

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	164
就職活動（エントリーシートなど）	96
レポート（授業、ゼミなど）	63
発表指導（授業、ゼミなど）	30
学習方法指導（練習も含む）	29
スピーチコンテスト	24
奨学金関係（申請書類、面接練習など）	22
学会発表・予稿集・投稿論文	4
その他	6
合　計	438

日本語相談室　2018年度相談内容内訳

2018年度の実績を見ると、利用者の内訳は6割強が正規大学院留学生、2割強が正規学部留学生であり、正規留学生向けサポートの仕組みとしてよく機能していることが分かる。相談内容は、全体の約7割が学習に関するものである。ウェブ予約システム導入から5年目を迎える現在、日本語相談室はほぼフル稼働の状態で、利用したくてもできない留学生がいるかもしれないことが心配される。今後は、現在の日本語相談室を核とした新たな工夫を考えていきたいと思っている。

2　授業を通して学びを支える

授業に関する学習面の日本語サポートも開発されつつあり、現在のところ、日本語教育センターと学部の取り組みがある。

まず、日本語教育センターの取り組みとして「漢字検定」がある。これはセンター設置当初からあるもう一つの授業外の日本語学習支援の取り組みであり、本学で学ぶ留学生の漢字の知識（読み、形の認識、意味）を判定するための本学独自の試験である。本学のコース設計の中で、限られた授業コマを従来型のレベル別の漢字クラスの設置に割くことなく、留学生の漢字学習を奨励したいという発想から生まれたもので、1年間に4回実施している。初級（6段階）、中級、上級（各7分野）と合計

20種類の試験がある。「検定」というだけあって、難易度が高いことも特徴の一つである。

受験状況を見ると、２０１１年度から２０１６年度までは、申込者数が1回につき10数名から20名前後、実際に受験するのはその約半分から3分の2程度で、主な受験者は特外生であった。一方、特外生対象の留学修了時のアンケートでは、漢字学習への強い要望が毎学期のように確認されていた。

このような経緯から、２０１７年度以後は新座キャンパスで週1コマだけ漢字クラスを設置することにした。漢字検定の受験を前提とする、レベル複合型の寺子屋式の漢字クラスである。２０１７年度は初級レベル、２０１８年度は中級レベルというように、漢字検定に準拠した教材を開発し、履修対象者を増やしていく計画にした。この結果、２０１７年度からは申込者数が30名から40名、実際の受験者数は約5割から約9割と増加した。２０１９年度は、上級レベルの教材を開発しながら履修対象者を広げているところであるが、この取り組みは自律学習促進のために授業開発を行った事例といえる。

学部でも経済学部、異文化コミュニケーション学部と取り組みが始まっている。ここでは、異文化コミュニケーション学部における「基礎演習」の留学生サポート活動を取り上げる。異文化コミュニケーション学部は、正規留学生の受け入れに際して日本語力の多様性を認めている。日本語だけでなく、英語による専門科目が十分に整備されているからこそ実現できる受け入れであるが、入学時の新入正規留学生とのアドバイザー面談などを通して、新入留学生が、協同学習や発信型の活動を中心にしたアカデミックスキルを学ぶ初年次の必修科目「基礎演習」に不安を感じていることが分かった。そのため、２０１５年度から、「基礎演習」について学生によるサポート活動を行っている。サポート活動は「基礎演習」の副コーディネーターを務める教員が組織し、２０１５年度はグループで、２０１６年度からはペアを編成して行っており、春学期は上級生、秋学期は同学年の学生も加わってボランティアで行っている。現在進行中のペアによるサポート活動は、対面やＬＩＮＥなど形態は自由であり、論文読解補助、レポート作成補助、発表準備補助など、留学生が必要とする内容をサポートする形を採用している。基本的に全学部生が「海外留学研修」を履修するという方針があるため、近い将来自分が留学することを意識したり、または自らの留学経験を踏まえて自分が本学

でできることを考えて行動する学生が多いという状況が、このボランティア活動を支える要因となっている。「基礎演習」を修了または学修中であり、授業の要点を理解している学生がサポートする点にも活動の良さがある。観察するかぎりでは、前述の国際センターが展開している特外生向けチューター制度同様に、サポート活動がうまく機能するケースは、定期的に活動でき、相互に学び合うことによって信頼関係も構築できている。継続的なインタビューや活動報告からは、サポートを申し出ている学生の胸に留学生自身が思い切って飛び込み、いかに自らの学びを深められるかという課題もあるように感じているが、こういったサポートをする側／される側双方の経験の積み重ねこそが、これからの時代に必要とされる資質を培う要素となると確信している。

3 「オール立教」が学びを支える

ここまで、一般的な留学生に対する日本語サポート、授業を介した日本語サポートの取り組みを紹介したが、最後に、冒頭で述べた、留学生を取り巻くさまざまな人々の存在を経験をもって認識すると同時に、目的を持った活動を通して多様な意見に触れる機会になり得る「オール立教」ともいえる日本語サポートの取り組みに触れる。

まず、日本語教育センターが年1回主催する、本学留学生による日本語スピーチコンテストがある。この事業は日々の学習の成果を披露する場であるので、本稿でも学習のための日本語支援事業の一環と位置付けたい。本コンテストの主役は、もちろんスピーチを披露する留学生であるが、それだけではない。登壇する留学生には本学の学生がスピーチアドバイザーにつき、会全体はボランティアの学生が組織する実行委員会が運営するという学生主体で展開する事業となっている。日本語教育センターの教員はもちろん、正規学部留学生のための日本語科目に関わる全学共通カリキュラム運営センターの部長、特外生の受け入れ業務も担う国

立教大学留学生による日本語スピーチコンテストに登壇した留学生とスピーチアドバイザーの学生

際センター長、日本語教育センターの副センター長や学部代表の教員が審査や総評を行う。そして、この会は本学卒業生が組織する東京セントポールライオンズクラブやレディスクラブの支援を受けて成立しており、まさに留学生は自らの学びが全学のサポートを得ていることを実感できる場になっている。この事業は、留学生だけでなく、留学生をサポートする側に立つスピーチアドバイザーや実行委員の学生が、この企画から学んでいることも大変意義深く、ぜひ本稿末に紹介するＵＲＬをご参照いただきたい。

また、英語による経営学修士プログラムには、留学生のための日本語科目がある。日本語教育センターは２０１３年度から、このプログラムに所属する、将来の企業幹部予備群のための日本語科目を提供している。この日本語科目には中級レベルと上級レベルがあるが、経営学研究科からの要望に応え、どちらの科目も、将来企業幹部になったときにふさわしい日本語の振る舞いができることを目標に展開している。このような授業に必要なことは、失敗が許される条件の下で複数回の日本語実践ができることである。そこで、力を借りているのが、立教セカンドステージ大学（以下、ＲＳＳＣ）という50歳以上のシニアのために創設した学びの「場」に集う、社会経験が豊かな履修生である。ＲＳＳＣの履修生には、事前の打ち合わせを経て、授業当日に顧客役や上司役に扮してもらい、留学生とビジネスシーンにおける日本語模擬実践について協力を得る。留学生がここで学ぶのは言語部分だけでなく、非言語部分、日本の企業文化、マナーなど幅広く、ＲＳＳＣ履修生にとっては、留学生の日本語習得のスピードの速さを認識し、若手育成の意義を感じる機会になっている。

最後に挙げるのが、全学の取り組みに位置付けられる「グローバル教養副専攻」に関する取り組みである。本学グローバル教養副専攻は、「〝専門性に立ち世界に通用する教養人の育成〟を目標とし、所属する学部学科や専修の専門性に加えて、複数の分野にわたる知識を一つのテーマに沿って修得することにより、物事を多面的に捉えて持続的に考える能力を育成するプログラム」であるが、２０２０年度には留学生向けの新テーマが設置される。この副専攻は、日本語科目と、日本の社会・文化への理解の深化に関する科目、およびインターンシップ科目の三つがセットとなって展開する。正規学部留学生が、自らのキャリア形成を模索しながら学部の学びや日本語学

習を進めることを促す仕組みで、全学共通カリキュラム運営センターと、学部のサポートを得た構成としている。これにより、日本語教育センターはこれまでの日本語教育の枠を少し広げて「日本語とキャリア」という観点から業務に当たることにもなるため、インターンシップ科目の開発は、豊かな知見を持つキャリアセンターのサポートを得て準備を進めている。

おわりに

以上、本学の留学生に対する学習面における日本語のサポートを、「自律的な学びを支える」、「授業を通して学びを支える」、および「〝オール立教〟が学びを支える」というカテゴリーに分けて、取り組みの現状と課題を報告した。

これらの取り組みは、日本語教育センターが年4回発行する「ニュースレター」を通じて、留学生向けに情報発信を行っている。本学のさまざまな学習面の日本語サポート体制や、留学生の学びを支える本学の構成員を紹介する機会とし、日本語サポートを活用した留学生の声も積極的に生かしている。

留学生向けのニュースレターの
日本語相談室の紹介記事

２０１９年４月に改正入管法が施行され、日本社会はより多様で大勢の外国人と共に生きる時代に向かっている。留学生の学習面の日本語サポートが、留学生が日本社会とつながって豊かに人生を切り拓くための力になっていくことは間違いない。今後一層力を入れるが、同時に、サポートする側にも意義がある活動にしていきたい。新しい時代に向かう学生は、卒業後突然多様な背景を持つ人と向き合うのではなく、来る時代にどのように向き合い、自身がどのように関わっていくかを考えて実践するための資質とレディネスを備えていることが期待される。本学在籍中にどのようなコミュニティーで４年間、大学院生なら２年ないし３年間を過ごすかが大事である。大学はそのためにメッセージ性のあるさまざまな仕掛けを作る必要がある。

現在取り組んでいる、留学生の学習面の日本語サポートは、本稿で示したとおり、留学生に有意義なだけではなく、サポートする側にとっても豊かな学びをもたらす

活動になりつつある。異文化間教育の領域では、齊藤・黒田（２０１９）のような研究も出てきているときでもある。真摯に取り組めば、意思が伝わり、サポートが得られる規模である本学の良さを生かし、次の時代を作るコミュニティーの醸成にも尽力したい。

齊藤美穂・黒田千晴（２０１９）「日本語学習者のサポーターとしての活動がもたらす日本人学生の気づき」『異文化間教育』第49号、異文化間教育学会、１１０―１２７。
立教大学「グローバル教養副専攻」
https://spirit.rikkyo.ac.jp/rmp/Pages/default.aspx
立教大学セカンドステージ大学「ニューズレター」
https://www.rikkyo.ac.jp/academics/lifelong/secondstage/newsletter/
立教大学日本語教育センター「スピーチアドバイザー、実行委員からのメッセージ」
https://cjle.rikkyo.ac.jp/essay/default.aspx
立教大学日本語教育センター「活動報告」
https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/default.aspx
立教大学日本語教育センター「ニュースレター」
https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/default.aspx